

Title	独立戦争とゴヤ
Author(s)	森本, 久夫
Citation	Estudios Hispánicos. 1973, 3, p. 129-141
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97877
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

独立戦争とゴヤ

森 本 久 夫

独立戦争 Guerra de la Independencia はナポレオンの侵略に対してスペイン人が独立を守るため戦った戦争のことであって、普通半島戦争¹⁾と呼ばれているようであるが、スペイン史においては独立戦争という呼称が使われている。

この戦争はマドリー市民が蜂起した1808年からフェルナンド7世の帰国した1814年までの6年間にわたって戦われた。

この戦争は画家ゴヤの生涯にとっても大きな衝撃であったとされている。歴史に疎い私たちはむしろゴヤの残した作品によってこの戦争に接したともいえるのではなからうか。私はこの小文において、その戦争とゴヤの残した一連の作品に焦点をあててみたい。

1

この戦争はスペインにとって大きな試練であった。それはスペインの国土で戦われた戦争では古代のイスラムの侵入、ゲルマンの侵入、今世紀の私たちの記憶にまだなまなましい市民戦争とともに、もっとも人々を苦しめたものだった。18世紀に啓蒙主義の洗礼を受けた人びとの努力で経済的改革が試みられ、ある程度の成果をあげていたのに、この戦争は国土を荒廃させてしまい、その影響は長く尾をひくことになったのである。

次に、この戦争の経過を辿ってみたい。

1789年フランス革命がぼつ発したが、ちょうど時を同じくしてスペインではカルロス4世が即位した。宰相フロリダブランカ伯はスペインを革命的フランスの宣伝から守ろうとしてフランス議会に敵対的態度をとった。しかし、革命の若き指導者たちと友好的になる方が国のためと信じた王后マリア・ルイサは彼を解任し、代わりにアランダ伯を据えた。しかしフランスでの事態は急を告げ、列国はつぎつぎにフランスに対し宣戦布告

し、イスパニアにも参加するよう要請するにいたった。もはやフランスと友好関係がつけられないとみると、王后は中立政策を行なったアランダ伯を不人気を口実に解任し、自らの寵臣ゴドイを任にあたさせた。

ゴドイはルイ16世を救おうと努力したが成功しなかった。そして王が処刑されると戦争は避けられなくなった。

フランスの革命指導者たちが抱いていたイスパニアをブルボン家の絶対主義王制から解放しようとするイデオロギーはごく少数の知識層を動かしたのみで、非常に宗教的で君主制に賛成な民衆は外国による支配ということに反感を示し、フランスとの戦いはきわめて民衆的な色彩を帯びるにいたった。とくにカタルーニアにはフランスから亡命してきていた聖職者や貴族が多く、またカスティールアの支配下にあったナバラ、バスク、アラゴンでもフランスの宣伝は反響がなかった。フェンテラビーアとサン・セバスティアンにだけフランス軍は侵入したが、それがフランスによる支配であって、自治でないことを知るや、民衆はフランスに反旗をひるがえした。

フランスの善戦に、プロイセンはフランスと交渉するにいたり、1795年スイスのバーゼルで和議が成立した。ゴドイも国内での戦争というきびしい状況を見て、協約にしたがった。その結果彼は平和公 *Príncipe de la paz* と呼ばれるようになった。

フランス側についたイスパニアは、フランスとともにイギリスと対戦し、1805年のトラファルガルの海戦でやぶれている。

ナポレオン軍は1807年フォンテンブローの条約でゴドイからイスパニア通過の許可を得るやリスボンに侵入、ためにポルトガル王家はブラジルに移った。

こうしたゴドイの行動に反対する人びとは1808年3月アランフェスで蜂起し、ゴドイの家を襲い、彼を捕えた。王は彼の助命を求め、王位を息子のフェルナンドに譲らねばならなかった。しかし、それを不満とした王とフェルナンド側の争いはつづいた。両者はナポレオンの招きに応じ、バイヨンヌに向かい軟禁状態におちいった。

そのころイスパニアに入っていたフランス軍は人びとの目がゴドイへの憎しみとフェルナンドへの熱狂に向かっていたために大きな抵抗もうけずに済んだ。そしてアランフェスの反乱と同じ頃、ミュラの率いるフランス

軍は市民の歓呼の聲に迎えられてマドリーに入った。しかし、それが誤まりであることはすぐに判明した。というのは、フェルナンドが首都を去ったのは強制によるものであり、ナポレオンはアランフェスのクーデターを認めず、ミユラにゴドイの釈放を命じたことが明らかになった。すぐさま、ナポレオンの真意をみてとった人びとの間に反フランス感情がかもされていった。

5月2日早朝から王宮前に群衆が集まり、王家の人びとがバイヨンヌに向け出発した。若い王子のひとりが車に乗らないと泣いているとの噂が伝わるや火の手が上がった。「みんな武器をとれ」「フェルナンド7世ばんざい」と叫び、命じられても解散しようとしなかった。ミユラは軍に命じて群衆に向かって発砲させた。フランス人、ポーランド人、ウエストフェリア人、エジプト人などから成る外国の軍隊に対するマドリー市民の憎しみが爆発した。あらゆるところで、市民たちは即製の武器をもって立ちあがった。とくにプエルタ・デル・ソルとバルケ・デ・アルティエリエリア・デ・モンテレオンとの戦闘は激しかった。イスパニア軍の将校ダオイス、ルイス、ベラルデたちは民衆側についてフランス軍に発砲した。しかし、彼らの行動は例外であって、イスパニア軍も政府もこの騒動には介入しなかった。フランス軍による弾圧は5月2日の夜から3日未明にかけてモンクロアのプリンシペ・ピオの丘やプラドでの銃殺となった。この事件はイスパニアの民衆とフランス軍の間に埋め得ない溝を掘ることになった。

首都を逃れた人びとは5月2日の事件を伝えていった。そしてマドリーの南西20キロのところにあるモストレスでは小村の村長2人によって小隊が編成され、首都をのがれてきた役人がその指揮をとることになった。この一隊は他の村々へフランスの裏切りに反対して武装蜂起して首都防衛に向かうよう説いてまわった。このモストレスの一隊はエストレマドゥラ街道をナバルカルネロ、タラベラ、トゥルヒーリョ、メリダ、アルメンドラレホ、フレハナルとウエルバの北方まで移動していった。まだ占領軍のきていなかった村々はたち上がったが、マドリーの反乱がただちに鎮圧されてしまったため、こうした動きが目的を失ってしまった。そしてモストレスの一隊は限られた成果しかあげ得なかったし、実際の戦争は20日ばかり後に始まるたけれども、国の上層部がまだナポレオン側につき、マドリ

一の反乱を公然と非難しているときにすでにフランス軍に反旗をひるがえした最初の人びととなった。それ故、モストレスの一隊はナポレオンの勢力に対するイスパニア人民の象徴的宣戦布告と考えられてきた。

1808年5月10日バイヨンヌで調印が行なわれ、フェルナンド7世は王位をあきらめた。そのニュースが伝えられると、王が勅令によって民衆にナポレオンへの服従を求めたにもかかわらず、人びとはフランス軍に抵抗するため、つぎつぎに武装蜂起していった。

各地に地方議会 *Juntas regionales* が成立し、それらは独立の政府としての機能を持ち、外国軍に抗戦する軍の指揮を行なった。ある地方は上層部の人びとのイニシヤティブによったが、大部分の地方では一般民衆に上層部が強制されたり、サラゴサやラ・コルーニヤのように罷免されたり、カルタヘナ、パダホス、カディス、セビリア、ハエンのように暗殺されたりした。フロリダブランカ伯はムルシア議会の、ホベリャーノスはアストゥリアス議会のそれぞれ先頭にたたされた。このアストゥリアス議会はまっさきに国際政策に乗り出し、イギリスと同盟を結ぶべく代表をロンドンに派遣した。ムルシア、カタルーニヤ、ガリシア、セビリアの各議会もそれにならった。したがってこの蜂起は民衆的なものであると同時に地方的色彩を帯びていった。またフランス人を不信仰者とみなし、フェルナンド7世への忠誠心をかかげるなど、宗教的であるともいえる。

各地方がフランスの支配に抵抗しているとき、中央の政府はナポレオンにその兄のヨゼフをイスパニア王に任じてくれるよう要請し、イスパニアの民衆には武器を捨てるよう命じた。そのため、あるところはずでに戦闘状態に入っているし、まだあるところはバイヨンヌへ派遣する議員を選出するという事態になった。当時ナポリ王であったヨゼフは6月7日にバイヨンヌに到着、ナポリの王位はミューラが継ぐことになる。そしてその日、ヨゼフはイスパニアの公式の代表たちによってイスパニア王と認められ、彼の君主制のもとにイスパニアを治めるための憲法を制定するため国会を15日に招集した。国会を構成する150人のうち91人の議員の出席をもって7月7日バイヨンヌ憲法は承認され、ホセ1世（ヨゼフ）はセバーリョス、カバルス、ウルキホなどカルロス4世やフェルナンド7世時代と同じ大臣たちによる政府を任命した。ホベリャーノスはアストゥリアス議회를ひきいており、その要請を拒否した唯一の人物となった。7月10日新王は

イスパニアに入り、20日にはマドリーに到着した。

しかしホセは歓迎されなかった。彼自身酒を飲まなかったといわれるのに、Pepe Botella, el Rey de Copas, el Pepino, José el Postrero などと蔑称されたのもその例であろう。

ただ少数の知識人、官僚、貴族たちは新しい王制によって国の進歩と改革があると信じた。フェルナン・ヌニェス、インファンタンド、オルガス、サンタクルスなどの諸公爵、セバーリョス、ウルキホ、アサンサ、カバルスたちのような政治家、フェルナンデス・モラティン、メレンデス・バルデスのような知識人、その他軍人、高位聖職者などで、そうした人びとの愛国心は民衆一般のそれとは根本的にちがった見解に立っていたため、彼らは親仏派 afrancesados と呼ばれて憎まれ、裏切者、日和見主義者とけなされた。

バイヨンヌ憲法はカトリック信仰を国教と認め、他のいかなる信仰も認めなかった。大臣の責任を明確にし、二院制 (Senado, Cortes) をしいた。国会 Cortes にはアメリカの議員も含め、行政的権能ももたせた。書籍に限り出版の自由を認め、住居の不可侵性を確立した。長子相続制と貴族の特権に制限を加えた。そして民法、刑法、商法を統一した。この憲法は中央集権的でイスパニアの構造的現実にあまり適するものではなかった。王の手に権力の大部分が残されていたが、以前の専制君主制よりは一步前進したものであった。しかし、戦争がその適用を妨げたとし、またイスパニアの民衆の大部分はうけ入れようとしなかった。しかし、その後のイスパニアの諸憲法に著しい影響を与えることになった。

イスパニアの民衆の武装蜂起のため、各地に駐留していたフランス軍は主要都市、戦略要地を占領するため移動しなけりならなかった。またたく間に、最初の衝突が起った。1808年6月初旬、ベシユールはログローニョ、バリャドリ、サンタンデル、アラゴンなどを占領したが、部下のルフェーブルは6月14日にサラゴサで敗れた。6月28日にはモンセイはバレンシアで敗れた。カタルーニアからサラゴサに向かおうとしていたフランス軍はカタルーニアの人民非常警備隊によって6月6日と14日の2度にわたり、ヘローナで妨害され、敗れた。しかしフランス側の最大の失敗はデュポンの軍隊に起った。彼はアンダルシアを占領、カディスに向かう筈であった。そしてコルドバまで進撃したが、激しい抵抗にあい、メセタに

後退しようとした。しかし、バイレンにおいてカスターニョスとレディングが率いるスペイン軍に退路を断たれ、7月17日降伏した。この1万4,000のフランス軍全体が降伏した事件は異常な反響をまき起こした。ホセ1世はマドリーを放棄、ピレネーに向かい、イギリス軍はこれを好機にウェリントンを先頭にポルトガルに上陸し、8月31日シントラでフランス軍を破った。その結果、ナポレオン自らがバイレンの汚点を消すために30万の大軍を率いてスペインに向かわねばならなかった。

9月25日、スペインには中央最高議会 *Junta Suprema Central* が組織され、地方議会の代表が集まり、年老いたフロリダブランカがフェルナンド7世の名で議長をつとめた。しかし現実には各地方議会が大きな自治権をもっていた。そして全スペイン軍の指揮権の統合は得られず、かえってナポレオンにとって有利な状況をつくることになった。そして、11月10日ブルゴスのガモナルでエストレマドゥラ軍が、11月23日にはやはりブルゴスのエスピノサでガリシア軍が、トゥデラではアラゴン軍がそれぞれ敗れた。

12月3日ナポレオン軍はマドリーに向かい、戦わずに首都は降伏した。ナポレオンは半島南部を占領するため部下を派遣する一方、自らは旧カステイリアまで進撃してきていたイギリス軍の退路を断つべく反撃にでた。そしてアストルガまで追ったとき、オーストリア軍が戦闘準備をしているというニュースに接し、部下のズールらにイギリス軍攻撃を命じ、自らはパリにひきかえした。そこでズールはイギリス軍をガリシアまで追いつめたが、イギリス軍がラ・コルーニアで乗船するのを防ぐことはできなかった。

一方、ラ・マンチャ、エストレマドゥラをフランス軍が再占領した。そして1809年1月から3月にかけて、ウクレス、シウダー・レアル、メデリンでスペイン軍が敗れた。2月21日アラゴンではサラゴサが、5月にはカタルーニアでヘロニナがフランス軍に陥ちた。しかし、この両市は簡単に降伏した訳ではなく、女までが抵抗を試みた果ての結果であった。レリダ、トルトサ(1810)、タラゴナ(1811)、シウダー・ロドリゴ、カディス(1810)などは激しい包囲にあいながらついに陥落しなかった。

これらのフランス軍に対する抵抗のもう一つの特徴はゲリラであった。それらの多くは農民からなり、知りつくした地理を利用して各地に出没、

フランス軍の連絡を断ったり、イスパニアの正規軍を助けて活躍した。地方議会が職業軍人の中から選んでゲリラの組織にあたらせることもあったが、軍人自らがゲリラにとび込んでいくものもあった。そうした軍人出身のゲリラ戦士としてはカタルーニアで活躍したミランス・デル・ボッシュ、サラゴサ防衛につとめたマリアノ・レノバーレスが知られている。農民出身のゲリラ戦士ではソリア、セゴビアなどで活躍したエル・エンペシナードのあだ名をもつホアン・マルティン・ディエス、ナバラ地方で活躍したエスポス・イ・ミナとその甥が知られている。またサラマンカの地主だったフリアン・サンチェスはゲリラに対して正規軍と同じような訓練を行なったといわれる。メリノ司祭やロビラ修道士のような聖職者もいた。またエル・カタコルやエル・ボルセロといった通称だけしか知られていない一群の人びとがいたが、彼らはどこまでがゲリラとして愛国的行動を行ない、どこまで盗賊行為として行動したのかわからなかった。

各地方議会がイギリスと結んでいた同盟は1808年10月中央議会で確認された。1809年春、ウェリントンは再びポルトガルに上陸、フランス軍を追ってガリシアに侵入、イスパニア軍と連合して7月にはタラベラでフランス軍を破った。しかしマドリーまで進撃できなかった。反対にホセ1世は11月にオカーニャで血なまぐさい勝利をおさめると、アンダルシアに侵入し、カディスを除く全域を占領した。中央議会はアランフェスからセビリヤへ、ついでカディスへと後退しなければならなかった。ここはイスパニアとイギリス両軍に防衛されていたのと、島のようなその地形からフランス軍に侵略されることのなかった唯一の地点だった。ここで5名からなる摂政政府に権力が移り、この政府が1810年6月国会を招集した。

このカディスの国会はかつての国会のように絶対君主制の飾り物のようなものでなく、フランスの革命議会やイギリスの議会、アメリカ合衆国の議会のように立法権をそなえた真の国民の代表である国会でなければならぬとする精神から生まれたもので、ここではいままでのように聖職者、貴族、都市といった三者を基礎とせず、国会で投票権をもつ都市の代表以外に住民5万人に1人の選出議員、各地方議会毎に1人の議員を出した。

しかし、国土の大部分が外国軍に占領されていたため、国会を構成する筈の100名の議員の半数しか選出し得なかった。そのためカディスに避難してきていた人びとの間から各地方、各都市を代表する代議員を任命した

ため、議会の代表的性格に制限がつく結果になった。また最初の会議から議員の意見は二派に分れ、4分の1は絶対君主制の存続を主張、4分の3はイギリス流の制限付君主制を主張した。前者は絶対主義派 absolutistas、後者は自由主義派 liberales と自称したが、それはその後のイスパニア政治の分裂の出発点となった。

このカディスの国会が行なった改革運動は1810年から13年にかけてつくられた一連の法律にみられる。しかしこの国会の行なった業績は1812年の憲法でその頂点に達する。この憲法は1791年のフランス憲法を参考にし、いずれの王家、いずれの個人のものでもない国家の主権を確立し、すべての基本法の作成は国家に属するものとした。個人の安全、住居の不可侵、所有権、請求権、出版の自由、納税の義務づけなどが保障された。そして国家の宗教はカトリックであるとされ、他の信仰はすべて禁じられた。またこの憲法は王の世襲制を決めたが、王には行政権のみ認めた。また住民7万人に1人の議員を選出して国会を構成することになった。この12年の憲法は圧倒的多数をもって認められた。

1810年から12年はじめにかけてフランス軍はセビリア、トルトサ、タラゴナ、バレンシアと占領することによってイスパニア征服を修了した。しかし実際には彼らは強力な軍隊を駐留させたところしか守ることができなかった。ゲリラ部隊はあいかかわらず、いたるところに出没して抵抗を行なった。またナポレオン軍はイギリス軍をついにポルトガルから追出すことができなかった。ウェリントンはリスボンを防衛しつづけ、1811年反撃にでて、フェンテス・デ・オニョロで勝利をおさめ、ブレイクやカスターニョスのイスパニア軍と協力して1811年5月ラ・アルブエラでフランス軍を破った。1812年初頭にはシウダー・ロドリゴ、4月にはバダホスに入った。

1812年春以来ナポレオンはロシア侵攻のためイスパニアから軍隊を引きあげねばならなかった。そこでウェリントンはカステイリアに進撃し、サラマンカとアルバ・デ・トルメスの間で7月22日フランス軍を破った。そこで国会はこのイギリスの将軍にイギリス、イスパニア、ポルトガル連合軍の総指揮権を与えた。ひきつづき連合軍はバリャドリーを占領したため、ホセはマドリーを放棄してバレンシアに後退した。8月にフランス軍はカディスの包囲を解き、アンダルシアを撤退、レバンテに後退した。そ

ここでフランス軍は再び反撃に転じ、ホセはマドリーに帰り、ウェリントン
はポルトガルに向けて後退しなければならなかった。しかしその冬ロシア
からの後退でナポレオンは大損害をうけ、ホセはマドリーを去ってバレン
シアに移った。しかしその後の戦いはフランス軍の後退に後退がつづき、
ホセは1813年国境を越えてイスパニアを去った。

1813年10月19日ライプツィヒの戦いで決定的な敗北を喫したナポレオン
は同盟軍に追われてフランスに後退、敵を減らすため12月にフェルナンド
7世と条約を結び、自らに有利な商協定と親仏派の保護と引きかえにフェ
ルナンドにイスパニアの王位を返還した。つづいてフランス軍はいまなお
占領をつづけていたカタルーニヤやサグントなどから撤退した。独立戦争
は終結し、1814年フェルナンド7世はイスパニアに帰った。

2

1808年に戦争がぼつ発したとき、ゴヤは62才であった。それは彼の人生
における二度目の大危機であった。

ブルボン王家の宮廷画家として、貴族たちを得意として絵筆をとり、社
交界に出入りしていたゴヤはその地位も活動する世界も友人の多くも失な
ってしまった。そして彼自身、今までの社会・政治勢力を破壊した悲劇と
流血を目撃することになったのである。

それよりまえ、1792年アンダルシア旅行の途中、カディスの友人セバス
ティアン・マルティネスの家で重病にかかり、つんぼになってしまった。
その時を契機に生まれたのが「気まぐれ」Los caprichos と呼ばれる一連
のエッチングであった。

今度の危機は病気ではなく、戦争であったが、今度も以前同様彼はエッ
チングに向かった。そして生まれたのが「戦争の惨禍」とか「戦禍」Los
desastres de la guerra と呼ばれている一連の作品である。

戦争中ゴヤはホセ1世の画家として生活し、彼から勲章さえもらっている。
彼はまたホセの大臣たち、フランスの將軍たち、友人を多くその中にも
っていた親仏派の人たちの肖像を描いた。また一方、サラゴサ包囲にお
けるイスパニア人のヒロイズムを示す絵を何枚か描いたし、のちにウェリ
ントンやサラゴサの防衛者パラフォクス將軍も描いた。ハビエル・デ・サ

ラスはこうしたゴヤを昔からの親仏派の改革者たちとの接触と自身の愛国的誇りに引き裂れ不安な状態にあったが、個人としてはフランスの侵入者に対する防衛者たちの偉業にくみしていると考えたのだと見做している²⁾。彼は多くの友人がいたにもかかわらず、ますます孤立状態に入っていた。1812年に彼の妻は死に、息子夫婦は彼と別居した。

戦争中から終戦直後にかけて、彼は將軍たちの肖像を描くかわら、親戚の肖像や戦争の惨禍を表わす一連の小さな絵、幾枚かの宗教画を残した。1814年彼は5月2日と3日のドラマティックな2枚の大作を描いた。また「闘牛」Tauromaquia や「ことわざ」Los proverbios の名で知られるエッチングの連作を行なった。「闘牛」はそれ以前から手がけていたものようである。

1819年彼は再び病いに倒れた。

ホセの時代が終わったとき、ゴヤはホセとの関係を否定しがたく、それまでの自分の政治的態度について為政者たちに納得させようと努めている。彼はもう一度宮廷画家として受入れられ、フェルナンド7世を数回描いた。その後、王も王家も描かなくなったが、宮廷画家としての称号と給料はひきつづき受けた。

1824年健康を理由に国外に出ることを許されフランスのボルドーに移った。それは一説にはフェルナンド7世の政府の迫害を避けるためであったといわれる。国外居住の延長が認められ、1826年恩給づきで退職、好きなところに居住してよいという王の許可を得た。1824年から亡くなった1828年まで、その間マドリーへの短期の旅行以外ボルドーでくらしした。

3

つぎに独立戦争と一番かわりのある「戦争の惨禍」を中心にみてみたい。

このシリーズはアカデミアの第1版の80枚にルフォールの所有していた2枚(No. 81と82)を加え、それに「捕虜」の3枚(No. 83, 84, 85)を合わせた85枚から成る。はじめゴヤは友人の歴史家で美術評論家のセアン・ベルムデスにこのセットを贈ったが、のちにそれがカルデレラの手に入った。

その制作時期についてはサンチェス カントンは「間違いなく戦争中にデッサンされ、——3枚に1810年の制作年が記されている——同じ時期か、多分、終戦直後の数年間に刻まれたが、ゴヤの生前には出版されず、やっと1863年になって、王立サン・フェルナンド美術アカデミーが、ゴヤの伝記的資料を付し、80枚のシリーズとして出版したのである」³⁾とのべている。

サラスはその発表は当時のイスパニアの政治情勢から1820年から23年にかけての自由主義時代としている⁴⁾。というのは帰国したフェルナンド7世はカディスの憲法の原則を認めるところか、自ら絶対主義王制を宣言、自由主義者たちを迫害し出した。それに対して各地で武装蜂起がおり、その結果自由主義の3カ年の到来となったが、フランス軍の侵入があって再びフェルナンド7世の反動政治が強まっていった。したがって、ゴヤが1824年にフランスに移っているから、彼が政治的迫害の恐れなしに大衆にこの「惨禍」を提供できたのはこの時期以外に考えられないことになる。

このエッチングの意味を理解するためには戦争がゴヤに与えた危機を考えねばならない。それは彼の健康に与えた危機ではなく、彼を引き裂き、苦しめた心の危機であった。批評家たちはこのコレクションが彼の生涯での最高の危機の結果であるとみなしている。彼は知的友人の大部分を改革派のりびとや進歩的なりびとの中にもっていた。そして、フランスの新しい思想の中に新しい社会への手がかりを夢みていた。しかし、一方にイスパニアがなんであり、またなんであらねばならぬかという彼の考えがあり、もう一方にはフランス人たちの裏切りとナポレオンの野心によってイスパニアが落ち込んだ悲劇に対する彼の恐怖があった。

同じ1820年ごろ彼は「つんぼの家」Quinta de sordo で黒い絵 pinturas negras の制作を行っていた。

ゴヤがセアシ・ベルムデスに贈った草稿に対するベルムデスの示唆した表題は「85枚のイスパニアにおけるボナパルテとの血なまぐさい戦争の不幸な結果と腹立しい気まぐれ」であったという。これは戦争の結果である荒廃、飢餓、犯罪を表わす画面をみるときゴヤの言おうとしたことをよく言い表わしているように思える。ゴヤがこれらの絵に表わそうとしたのはフランス軍側のはげしい攻撃と残虐さであり、それに抵抗するイスパニア人の強固さである。殺し、切りきざみ、略奪するのはフランス兵であり、

苦しみ最善を尽くして自衛するのはイスパニア民衆である。イギリス軍については No. 17 のイギリスの将軍を除いて全く描かれていないとサラスは指摘している⁵⁾。

ゴヤは愛国心に動かされたひとりであった。今までの批判的精神をもってしても、近く親しかった者へのフランス軍の攻撃をみても耐えられず、愛国者側に参加した。そして彼の友人の多くをフランスに結びつけていた絆を断ち切った。多くの改革派の人びとの友であり、親仏派の人びとの友であったゴヤは「戦争の惨禍」を一般的な戦争の恐怖の告発として刻んだのではなくて、もっと直接的な同胞人の苦悩の説明として、ナポレオン軍の告発をやるためであった。彼は自ら目撃するか、目撃した人から語られたものを記録したのであってそれは寓話ではない。No. 44 には「私はそれを見た」yo lo vi と書き添えられている。カントンは「『戦争の惨禍』はフランス占領時代におけるゴヤの態度を確定的にしている。ゴヤが独立戦争を、自ら目撃したことに一切触れずに、ただ人類に対する筈として扱っていると看做そうとすることは愚かな態度といわねばならないが、彼の気性もまた、そうしたあいまいさに向いてはいなかったのである」と記している⁶⁾。

一方、「18世紀キリスト教にゴヤが負うたものはなにかといえば、それは福音書から政治世界へと移行したところのもの、つまり人間は正義を要求する権利を有するとの確信であった」⁷⁾とみるマルローは「惨禍」をみつめて「ゴヤは、人間が地上に來たのはハツ裂きにされるためではない、とまず考えるとともに、ではなにものかのために來たはずである、と思ひめぐらす画家でもあった」と考える⁸⁾。

プラド美術館のゴヤにあてられた部屋の一つの壁の一面を「5月2日」と「5月3日」の2枚の絵が占めているが、「5月3日」の銃殺の絵を眺めるたびに、私は言いようのない割り切れなさを感じたものだった。銃を向けたフランス兵たちに向かって両手をあげた男が輝らし出されている。その目の奥で死を前にしてこの男は何を考えているのだろうと思った。マルローの「ゴヤ論」を読んでいて、「戦争はおわった。不条理がつづくのだ」⁹⁾という言葉に出会って、これだと思った。

マルローの考えるように、「惨禍」の中の No. 2 の「理由があろうとなくあろうと」con razón sin ella などはこの「5月3日」のための準備であ

ったのかも知れない。

ただ、私はこれらの絵からイスパニアの独立戦争に目を向けるようになったし、ゴヤに魅かれるようになっていった。

註)

- 1) 京大西洋史研究室編、西洋史辞典、14版、創元社
- 2) *The Disasters of War*, Anchor Books, New York, 1956, pág. 15
- 3) サンチェス・カントン著、神吉敬三訳「ゴヤ論」美術出版社、1972, pág. 190
- 4) 既出 *The Disasters*, pág. 19
- 5) 前掲書, pág. 22
- 6) 既出、カントン, pág. 192
- 7) アンドレ・マルロー著、竹本忠雄訳「ゴヤ論」新潮社、1972, pág. 155
- 8) 前掲書, pág. 156
- 9) “ ”, pág. 173

参考文献

註に挙げたもの以外に次のものを参照した。

Pedro Aguado Bleye y Cayetano Alcázar Molina : *Manual de Historia de España II*, Espasa-Calpe, Madrid, 1964.

S. Sobrequés Vidal : *Historia de España Moderna y Contemporánea* 3a. ed., editorial Vicens-Vives, Barcelona, 1968.

Diccionario de Historia de España 2a. ed., Revista de Occidente, Madrid, 1968.

井上幸治 : ナポレオン, 岩波書店, 昭和36年

Gaspar Gómez de la Serna : *Goya y su España*, Alianza Editorial, Madrid, 1969.